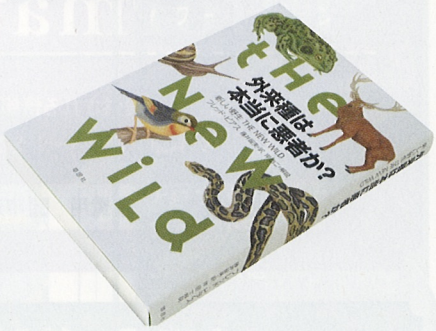
趣味からはじめる昆虫学
熊澤辰徳 著
オーム社　2600円（税別）

天文学者たちの江戸時代
暦・宇宙観の大転換
嘉数次人 著
ちくま新書　780円（税別）

外来種は本当に悪者か？
新しい野生 THE NEW WILD
フレッド・ピアス 著　藤井留美 訳
草思社　1800円（税別）



いなかったに違いない。天の声を読む「天文占」と暦作りの時代から，西洋天文学の流入も受けて宇宙観が変わっていった江戸時代の人々を描く『**天文学者たちの江戸時代**』を読みながらそう思った。

本書が取り上げているのは主に幕府の天文方と周辺の人々だ。初めて日本独自の暦を作った渋川春海，天文学大好きでトップダウンで暦を変えようとした徳川吉宗，日本地図作りの伊能忠敬らのおなじみの話をさらに掘り下げて，彼らの生きた時代の思想的つながり，変化がわかる。

麻田剛立は知識を積極的に公開するなどオープンな雰囲気で多くの人たちと学問的交流を行い，データの収集を行って，宇宙観を変えていったという。当時から知のレベルを上げる方法は同じだったのだ。

『**外来種は本当に悪者か？**』は，在来種，外来種という分け方やイメージは正しいのかと問う。自然は常に変化していて，生き物たちは互いに好きに生きている。外来種＝悪という構図は間違っており，むしろ活力をもたらすことも多いという。

人は変化に抵抗しがちだ。だが今のままを保つことにこだわりすぎる視野の狭い自然保護は環境の変化に対応する力を損ねてしまう。「手つかずの自然」の維持のために管理が必要というのは本末転倒であり，甘やかされていない自然が「ニュー・ワイルド」だと著者は述べている。

（もりやま・かずみち：サイエンス・ライター）

Book Review

オミメティクスなど，興味をひかれる話題が並ぶ。日本の人口は減少し始めているのに，景気もよくないのに，空き家も増えているのに，なぜ高度成長期と同じように身近な自然が失われていくのか。合点がいかないと述べる著者は，未来のためのさまざまな方策を検討する。コンパクトシティの可能性，環境や生物に配慮した認証制度，省エネルギーへの技術開発。だが制度や技術革新だけで私たちは変われるのか？　最も必要なのは価値観の転換であり，実践の中で多様性の価値を示してくれる教育なのだろう。

実験数学読本
真剣に遊ぶ数理実験から大学数学へ
矢崎成俊 著　日本評論社　2800円（税別）

針金や木材，発泡スチロールなど身近な材料を使った数学実験を通して，物理現象を学ぶユニークな実験本。針金の枠に石けん膜を張る実験は，子供向けの理科実験本にもたびたび登場するが，本書では表面張力の解説が続き，表面張力による面積極小の原理，膜の張り方の法則へと展開する。害虫の突発的大量発生モデルでは，米国での実例をもとにしたモデル方程式を検証し，カタストロフィーを実感できる装置（ジーマンのカタストロフィー機械）を作って実験をする。多くの科学者のアイデアが盛り込まれているため，テーマの1つ1つに個性があって楽しい。理科や数学の授業に取り入れれば，ぐっと興味が増しそうだ。

自然がほほえむとき
伊沢紘生 著　松岡史朗 写真
東京大学出版会　3200円（税別）

ニホンザルやアマゾンの新世界ザルの研究で知られる霊長類学者の伊沢氏と写真家の松岡氏によるエッセイ写真集。前半は半世紀を超えるサルとの付き合いを通してみた自然の姿，後半はけもの，鳥，昆虫，植物の見事な写真，さらに子どもや学生たちとのフィールドワークの様子を綴る。エッセイは過去に発表されたものに書き下ろしを加えた。糸かがり綴じの製本は開きやすく，写真の多いレイアウトをより美しいものにしている。